

楯木工製作所

Pick Up!

平成28年度

事業計画名

日本遺産「木曾路」の伝統技術を未来に繋げ世界に発信する

概要

「組子細工」製作工程における熟練職人不足や設備老朽化による生産効率低下に対し、レーザー加工機を導入し、技術承継、精度・生産効率の向上を図るとともに、新たな機能・デザインの新製品を試作開発し、顧客層開拓と販路拡大を図る。

分類

＜対象類型＞ ものづくり技術

デザイン

精密加工

測定計測

＜事業類型＞ 小規模型・設備投資のみ

成果

設計に係る熟練工の高度な技術・ノウハウがデジタルデータ化でき、またレーザー加工により熟練工以外でも安定した精度で生産できることが確認できました。

レーザー加工機の出力があまり大きくないこともあり板の薄さを追求した結果、鉋屑に組子細工の模様を彫ることに成功し今後の事業化に向けての大きな発見になりました。



施工事例



施工事例



施工事例

好機逸すべからず

「ものづくり補助金」採択企業を訪ねて

楯木工製作所（南木曽町）

本物の職人の技とレーザー加工の技を融合、
木曽ヒノキや伝統工芸の魅力を世界へアピール。

技を継承しつつ、時代の流れに対応

昔からヒノキは高級な建築用木材として知られています。中でも、木曽ヒノキは、別格の存在として伊勢神宮の遷宮にも用いられてき



伝統と最新の技を融合 ペンダントライト

ました。冬の寒さが厳しい木曽谷で長い年月をかけて育ったヒノキは、年輪が詰まっており、とても良質で希少性があります。楯木工製作所は、地元の木曽ヒノキにこだわり、独創性豊かなものづくりを展開しています。

林業に携わる人が多い木曽谷の地で、先代は「曲げわっぱ」と称される、円筒形の米びつや弁当箱などの器を手がけ、昭和23年に創業しました。薄いヒノキの板をしなやかに曲げるのは職人の技。このような伝統の技を大切にしながらも、同社は、時代のニーズを捉えた様々なものづくりに挑戦してきました。

最初の転機は、昭和40年代のエレキ・ブームでした。当時、バンドで使うドラムの需要も非常に高まり、同社は「曲げわっぱ」の技術をドラムづくりに活かしたところ、受注が相次ぎました。さらにオーディオ・ブームが訪れると、伝統的な組子の技術をスピーカーグリルに活用しました。釘を一切使わず、小さくて薄い木片のパーツを一つずつ手作業で組み合わせてつくる伝統工芸「組子細工」。その繊細な模様は、ベトナム戦争で疲弊した在日米軍兵の心を癒やします。彼らがそのスピーカーをアメリカに持ち帰り、やがて世界中のオーディオファンから支持されるようになりました。そしてバブル期、住宅建築ブームで高級な和室が注目され始めると、同社は和室の組子欄間を手がけ、市場からの期待に応えました。

日本の伝統工芸を世界へ発信

「いま組子細工をはじめ伝統工芸の世界は職人が高齢化して、どこも若手がいなくて困っています」と楯高男代表。平成28年度ものづくり補助金でレーザー加工機を導入した背景にも、この技術

承継の課題がありました。実際に導入し、熟練工の技の一部が代替されるとともに、新たな可能性も確認できたそうです。同社の後継者であり、導入担当の楯敏彦氏は次のように語ります。

「組子細工の柄を一瞬でくり抜いたり、繊細な透かし模様を入れたり、レーザーにしかできないデザイン加工があります。当社に本物の職人の技があるからこそ、機械の技との組み合わせが生きる、と思いました」。

事例として、サッカーボール型のペンダントライトを見せてくれました。五角形と六角形を組み上げるのは熟練の技ですが、それら多角形の枠の中の模様を組子細工にしたり、板のレーザー加工にしたり、製品の選択肢の幅をデザインの的にも価格的にも広げたそうです。

「当社の伝統工芸の技術は、差別化が必要な施設関係者や個人のお客様から求められています。特に近年は海外からの問合せも多く、実は外国人旅行者向けのお土産も企画中です。もっとオリジナル製品の種類を増やして、世界に発信していきたいですね」。

若き後継者を中心にした、伝統の枠を越えたものづくりに、これからも注目です。



レーザー加工機



レーザーで加工した組子細工の模様



ショールーム内の建具サンプル



楯木工製作所

代表 楯 高男

創業 1948（昭和23）年

従業員数 4名

本社 木曽郡南木曽町読書3291-2

TEL.0264-57-2300 FAX.0264-57-3321

URL.<http://tatemoku.jp/>

事業内容 木製建具、家具、木工製品、組子製品の製造、販売

